

「マス・カタルシス」(大衆の自浄作用)と呼んでいる。それゆえにブルーマーにおいてはヨーロッパの大衆論者の多くがそうであったような、大衆に対する懐疑・嫌悪はなく、さりとして我が国の市民主義者たちがそうしたように、大衆への信頼・礼賛が示されることもない。大衆のメカニズムは日常性と非日常性の間で揺れ動く現代人にとって、新たな生活秩序を構築するサバイバル競争を生き抜くための、内的メカニズムの発現形態にほかならない。社会そのものの内的理論にいかなる形であれ権力が介入しようとするれば、生活秩序の再生に不可欠な人々の主体性の育成を妨げ、ひいては「飼い慣らされた人間」の育成を助長してしまうことを忘れてはならない。

◎ 6月26日

## 平成2年度在外研修報告要旨

### 釈迦の遺跡を歩いて

坂 誥 秀 一  
(史学科教授)

平成2年度の在外研修(「仏教遺跡の調査研究」)として、インドネシア・韓国・インドの仏教関係遺跡を踏査した。なかでもインドにおける釈迦関係の遺跡は、釈迦出家の故城跡の比定地を求めて約10年間にわたってインド・ネパールの国境をはさむタライ地方を調査し、ティラウラコット遺跡の発掘調査を実施したこともあって、このたびの研修に際して是非とも再訪したい希望をもっていった。

インドネシアにおいては、ボロブドゥール仏塔、韓国においては、益山の諸寺院跡を踏査し、予期した結果を得た。ボロブドゥール仏塔における修覆の実際、益山の新発掘による知見については、改めて私見をまとめたいと考えている。

釈迦の遺跡は、19世紀以来、イギリス・フランス・ドイツ・アメリカ・インド諸国の考古学・銘辞学・建築学そして仏教学を専攻する研究者によって関心もたれ、それぞれの立場より明らかにされてきた。

生誕の地・ルンビニー、開悟の地・ブッダガヤ、初転法輪の地・サールナート、入滅の地・クシナガラ四大仏跡をはじめとして、釈迦の足跡が具体的に知られてきた。これらの遺跡は、カニンガムなどを中心とする主としてイギリスの考古学者の努力によるもので、現在それらの遺跡の管理はインド考古学調査局によって整然と引き継ぎ、仏教徒をはじめ、世界各地より訪れる人びとに膾炙されている。

これらの遺跡を10年ぶりに訪れ、親しく観察してきたが、仏跡のそこかしこに日本人臭が夥しく漂っているのに閉口した。かつての仏跡は静寂そのものであり、往時もかくや、と思せるものがあった。その変ぼうに一驚したが、かかる要因を考えると、日本人による観光的仏跡訪問こそが最大の原因であることに気付いた。諸仏跡にある日本の仏教徒によって建立された人気のない僧堂は、その象徴と映じた。

遺跡は、以前にも増して整備されていた。修覆も日常的に実施されているようであり、かつての見学の時と同じ感激をもった。遺跡地に建てられた小博物館で販売されている解説書(インド考古調査局刊)も、博物館の陳列も変ることなく迎えてくれた。ただ、ルンビニーは大きく変わりつつあった。ネパール考古調査局による発掘と整備は一段落し、ルンビニー整備計画の本格的着手を待っていた。全日本仏教会によるマヤ堂の解体整備をはじめ、いくつかの整備工事が予定されている。

いまや、釈迦の遺跡は、全世界の仏教徒、仏教に関心をよせる多くの人たちによって注視されている。かつてイギリスの考古学者の努力によって明らかにされ、発掘され、修覆されてきた諸遺跡

を今後どのように整備し活用していくべきか、考古学で対象とする関心事を越えて、仏跡に関心をもつ日本の仏教徒の対応が、いまほど問われている。

るときはないであろう、との感懐をいただいたのである。

◎10月23日

### 共同研究（B）中間報告

#### 地方都市の構造と変動

斎藤昌男  
(社会学科教授)

前田征三  
(社会学科教授)

内山幸久  
(地理学科教授)

松井秀郎  
(地理学科専任講師)

#### 東アジアにおける異文化交流の研究

吉田寅  
(史学科教授)

木崎良平  
(史学科教授)

要旨は86頁～87頁参照

## 平成3年度特別講演要旨

平成4年  
1月29日

### 銀座、そして銀座化現象

服部 銈二郎  
(地理学科教授)

偉大で、シンボリックな地域現象は、どこことなく他の地域現象に比べ、異常で驚くほどのユニークさを発揮し、巨大な影響や波及効果を、地域活動や都市機能に与えるものである。国際化・高度情報化・ソフト化・高速化が進行する成熟社会において、そのことは真実味をもってわれわれの生活に迫ってくるようである。高次機能の一極集中を、ますます強めつつある世界都市「東京」の現実、本論で述べる異常な街「銀座」の強烈で、迫

力に充ちた展開構図などは、ナンバーワンを獲得した地域現象が、知らず知らずのうちに練りあげられていく、人間社会の宿命的必然なのだろう。このことは、最も人間らしい人口集団「大都市」において、さらにその核心部であるカオス空間「都心盛り場」において、最高に演出されるようである。

“都に登り、天下に号令する”と、戦国武将の生き様願望は、いつの世でも変わることがない。天下事業家が東京で成功し、天下商人が銀座で名をあげ、その勢力圏を拡大する構図は、なんと魅力的なことだろうか。日本列島における場としての東京「銀座」は正に、ビジネス・宣伝広告・信用・ステイタス・満足感などにおいて、生活文化やチャレンジ空間として完全に日本人の都といえるであ